

夏目漱石

ケ―ベル先生の告別



ケーベル先生の告別

ケーベル先生は今日きょう（八月十二日）日本にほんを去るはずになっっている。しかし先生はもう二三日まえから東京にはいないだろう。先生は虚儀虚礼を嫌きらう念の強い人である。二十年前大学の招聘しょうへいに応じてドイツを立つときにも、先生の気性を知っている友人は一人ひとりも停車場ステーションへ送り来なかつたという話である。先生は影のごとく静かに日本へ来て、また影のごとくこっそり日本を去る気らしい。静しずかな先生は東京で三度居を移した。先生の知っ

る所はおそらくこの三軒の家と、そこから学校へ通う道
路くらいなものだろう。かつて先生に散歩をするかと聞
いたら、先生は散歩をする^{ところ}処がないから、為^しないと答
えた。先生の意見によると、町は散歩すべきものでない
のである。

こういう先生が日本という国についてなにも知ろうは
ずがない。また知ろうとする好奇心を有^もっている道理も
ない。私^{わたし}が早稲田^{わせだ}にいと^{いつ}言てさえ、先生には早稲田
の方角^{わか}が分らないくらいである。深田^{ふかだ}君に大隈^{おおくま}伯^{はく}の宅^{うち}へ
呼ばれた昔を注意されても、先生はすでに忘れている。

先生には大隈伯の名さえ初めてであつたかもしれない。

私が先月十五日の夜晚餐よばんさんの招待を受けた時、先生に国

へ帰つても朋友ほうゆうがありますかと尋ねたら、先生は南極と

北極とは別だが、外ほかの処ならどこへ行つても朋友はいる

と答えた。これはもとより笑談じょうだんであるが、先生の頭の

奥に、区々たる場所を超越した世界的の觀念が潜ひそんでい

ればこそ、こんな挨拶あいさつもできるのだらう。またこんな挨拶

ができればこそ、大した興味もない日本に二十年も永なが

くいて、不平らしい顔を見せる必要もなかつたのだらう。

場所ばかりではない、時間のうえでも先生の態度はま

まったく普通の人と違っている。郵船会社の汽船は半分荷に物もつぶね船ふなだから船足あしが遅いおそのに、なぜそれを撰えらんだのかと私わたくしが聞いたら、先生はいくら永く海の中に浮ういていても苦くるにはならない、それよりも日本からベルリンまで十五日で行けるとか十四日で着けるとか言いって、旅行が一日でも早くできるのを、非常の便利らしく考えている人の心持こころもちが解わからないと言いった。

先生の金銭上の考えも、まったく西洋人とは思われないいくらい無頓着むとんじやくである。先生の宅うちに厄介やくかいになっていたものなどは、ずいぶん経済の点にかけて、普通の家には

見るべからざる自由を与えられているらしく思われた。

このまえ会った時、ある蓄財家の話が出たら、いったいあんなに金を溜めてたどうする料簡りようけんだろうと言つて苦笑していた。先生はこれからさき、日本政府から貰もらう恩給と、今までの月給の余りとで、暮らしてゆくのだが、その月給の余りというのは、天然自然にできた本当の余りで、用意の結果でもなんでもないのである。

すべてこんなふうにでき上あがっている先生にいちばん大事なもの、人と人を結びつける愛と情なさけだけである。ことに先生は自分の教えてきた日本の学生がいちばん好

きらしくみえる。私が十五日の晩に、先生の家を辞して帰ろうとした時、自分は今日本を去るに臨んで、ただ簡単に自分の朋友、ことに自分の指導を受けた学生に、「左様さようなら御機嫌ごきげんよう」という一句を残して行きたいから、それを朝日新聞に書いてくれなかと頼まれた。先生はその外ほかの事を言うのは厭いやだというのである。またいう必要がないと言うのである。同時に広告欄にその文句を出すのも好まないというのである。私はやむをえないから、こゝに先生の許諾を得て、「さようなら御機嫌よう」のほか、私自身の言葉ことばを蛇足だそくながら付け加えて、

先生の告別の辞が、先生の希望どおり、先生の薫陶くんとうを受けた多くの人々の目に留まるように取り計らうのである。そうしてその多くの人々に代って、先生に恙つつがなき航海と、おだや穏かな余生とを、心から祈るのである。

(大正三・八・一二)

日本文学電子図書館

ケーベル先生の告別

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第11巻」角川書店
昭和42年7月30日 7版発行



日本文学電子図書館